2026年の世界のワイン生産量、1%減の見通し

OIVは2026年の世界のワイン生産量を2億2,500万ヘクトリットルと初期推計。ブドウ畑の面積は2020年以降4.8%縮小した。

2026年11月19日（木）



国際ブドウ・ワイン機構（OIV）は、2026年の世界のワイン生産量が2億2,500万ヘクトリットルとなり、2025年から1%減少するとの初期推計を発表した。供給が抑制される状況が続くことを示す見通しだ。

この推計は、ワイン市場が成長局面に戻るのではなく、需要の低迷に合わせて調整を続けていることを示す動きに加わる。OIVによると、世界のブドウ畑の面積は2020年以降4.8%縮小しており、消費動向の変化を受け、作付面積が広範に減少していることを反映している。

この2つの数字を合わせて見ると、業界の供給基盤がなお縮小していることが分かる。ブドウ畑の

面積が減っても、毎年の生産量がそのまま減少するとは限らない。収穫量は天候や単位面積当たりの収量にも左右されるためだ。ただし、作付面積の縮小は、調整の一部が単一シーズンの気象条件だけでなく、構造的な要因によることを示唆している。

OIVの推計は、収穫規模を示す世界的な指標として早い段階で公表されるため、ワイン取引業界から注目されている。ワイナリー、輸出業者、輸入業者、流通業者、小売業者にとって、この数字は商品の入手可能性や在庫水準、仕入れ計画の見通しを左右しうる。また、飲料業界全体の買い手が調達、在庫管理、価格交渉を検討する際にも影響を及ぼす可能性がある。特に、ワインがビールやスピリッツと棚スペースや消費者支出を争う市場では、その影響が大きい。

2026年の推計は、近年供給が減少しているにもかかわらず、生産者が生産量を拡大していないことを示している。むしろ、最新データが示すのは、市場が需要により見合った水準へと調整されている状況だ。2020年以降のブドウ畑面積の縮小もこの見方を裏付けており、飲酒習慣の変化や世界の一部地域で長期的に消費が低迷するなか、一部の栽培農家や産地が生産への関与を縮小してきたことを示唆している。

OIVは2億2,500万ヘクトリットルという数字を初期推計と位置づけており、最終的な生産量ではなく、早い段階での見通しであることを意味する。初期の生産量推計は、より完全なデータがそろう前に商業計画を立てる際の基準となることが多いため、市場関係者にとって重要だ。最終的な数字がわずかに変わるだけでも、取引の流れや出荷時期、既存在庫で需要をどの程度の期間まかなう必要があるかという判断に影響する可能性がある。

今回の予測は、世界のワイン業界が複数の圧力に同時に対応している時期に発表された。多くの国の生産者は、消費者の嗜好の変化、一部の成熟市場におけるワイン消費の低迷、供給が販売を上回った際の財務的な負担に対処してきた。ブドウ畑の面積を縮小すれば、供給過剰を抑え、価格を下支えし、売れ残り在庫を抱える負担を軽減できる場合がある。一方で、需要が回復した際に生産を迅速に増やす余地は狭まる。

ワインの仕入れ、輸送、融資に携わる企業にとって、OIVの推計は次の販売サイクルを前に市場環境を評価するための新たな基準となる。生産量の減少だけで、特定の国の価格や入手可能性が決まるわけではない。繰越在庫や地域ごとの収穫量の違いも影響するためだ。それでも、2億2,500万ヘクトリットルという予測と、2020年以降のブドウ畑面積の4.8%縮小を合わせると、業界が異なる需要環境への適応を進めるなか、世界のワイン供給基盤が引き続き圧力を受けていることがうかがえる。